

ついに植えてしまった

荒尾支部 中島 和広

「36歳の冬ついに自分でぶどうを植えてしまうなんて・・・」

私は祖父の代から続く、梨農家の家に生まれました。

幼い頃から友達が遊びに行っている時に、収穫などの作業を小遣いにつられて手伝っていましたが、本当は、遊びに行きたかったのがその時の本音でした。農業のきつい・きけない・きけんの3Kを幼いながらも体感し、絶対にしたくないという気持ちが強くありました。

高校は、小学校から柔道をしていた関係もあり、レスリングの推薦をもらい学科試験の免除があったので北稜高校に進学を決めました。北稜高校では、家が梨農家という事もあり果樹を専攻して勉強・部活に励みました。その中でも、実習はきつく改めて農業だけは絶対にしたくないと思いました。

その後、やりたい事が見つからずなんとなく就職をして事務、職業訓練所、建設業、工場などを転々とし、梨の最盛期になれば強制的に駆り出されていました。その時も、やっぱり農業だけはしたくないと思っていました。

しかし、会社員をやめ次の仕事を探しながら家の手伝いを2～3年やっていた時、父の背中から年々力強さがなくなっていく事を感じました。そんな時に、父から「家の周りで土地があるけん農業ばせんか？」と声が掛かりました。最初は農業なんて絶対にしないと断っていましたが、やりたい仕事が無かったことと父の体力的なことを思うと、一回やってみてもいいかなと思い就農を決めました。

就農するにあたり、まず梨を考えましたが近年の状況を見ていると、みつ症・ヤケ果などの被害に悩まされている状況からみて、厳しいという結論に至りました。

そこで、父が「ぶどうはどがんや？」と提案をしてくれました。荒尾市では盛んではなかったものの、家の周辺で増えていた事もあり、ぶどうを作っている方々に話を聞くと、手間はかかるけど高単価のぶどうはおすすめという事を聞き「これだ！」と思い、ぶどうでの新規就農を決意しました。

就農して1年目は味に定評のあるシャインマスカットを2反半作付けしました。

最初はどのような作業工程なのかもわからず、毎日のように近所でぶどうを作っているところに通い、教えてもらっていました。特に斜面での棚づくりは、肉体的にとてもしつこく、なかなか作業がはかどりませんでした。何とか形になっていきました。

しかし、2年目に収穫はないからとハウスにビニールを掛けなかったため、ぶどうにとって致命傷の黒とう病の被害が発生しました。どうしようと頭を抱えていましたが、家族総出で消毒などの作業を手伝ってくれたので、なんとかこの時期を乗り越える事が出来ました。

そこで、JAの指導員の方に黒とう病を防ぐためにはどうしたらいいのかを相談し、事前の準備の重要性に気づき、3年目からはどんな作業でも計画した工程通りに進める事により、黒とう病が入らなくなりました。

また、工程通りに作業を進められるようになったため、作業に追われ後手を踏むことが無くなりました。

そこから、BKシードレスとすずかを定植しました。この2品種は聞きなじみがないと思います。BKシードレスは遺伝的にほとんど種子を作らないため、ぶどうを種子なしにするための作業が基本的には不要です。

また、摘粒も他の品種に比べ手が掛からず、早期に袋をかけることができるので減農薬栽培ができます。

すずかは、近年着色不良が問題になっている、巨峰と比較される黒系品種です。着色は巨峰より良く、マスカット系の品種となる為、人気のシャインマスカットの香りに似ています。

また、収穫時期が早いので早い時期にぶどうを出荷できます。この3品種の特徴を生かし作業を分散させることで、現在では4反でぶどうの生産を行っています。6月の摘粒の時期は忙しくなるため、梨の袋掛け作業が落ち着いた家族の手を借りながら作業を行っています。

そんな中、梨をもらいに来た農家の同級生から青壮年部への勧誘がありました。

最初は断っていたものの、熱い想いをぶつけられているうちに青壮年部に興味が湧いてきました。

そこで、梨部会の先輩に青壮年部について聞いてみると「楽しいけん入ってみんね」と言われ、それなら入ってみるかと思ったのが青壮年部との出会いでした。

最初は、活動なども気が乗らず足が重かったのですが、活動に参加していく内に盟友

との親睦も深まり、様々なことを語り合うようになり、農業に対する考え方や向き合い方は、人それぞれで自分なりの農業をすればいいと気づかされました。

そして何より、色んな事を相談できる盟友ができたことで、青壮年部に入ってよかったと実感しています。

現在は、販売所での個人販売のみですが、今後は個人販売以外の販路の確保が課題です。

また、同じ棚も使える梨からぶどうへの転換も視野に入れながら、スマート農業などの新しい農業を取り入れ、作業の効率化を図り安定した収量の確保をできるように努力していきたいと考えています。

さらに収量が増えれば、インターネットの活用や価格変動の少ない道の駅や直売所へと販路を拡大し、より多くの方へ手に取って頂けるよう励んでいきたいと思っています。

絶対にしたくないと思っていた農業ですが、やっていく内に会社員時代には無かった自分自身に決定権があり、自由に仕事ができることや、やった分だけ自分に返ってくる楽しさを感じています。

また、販売所を出す場所一つにしても、親と口論になります。収入に直結する部分という事もありますが、それだけ農業に対して真摯に向きあっているんだと感じます。

嫌いだった農業も、今では胸を張って好きと言えます。

ご清聴ありがとうございました。